

癌に冒されて ヨットを始めた

人は常識を越えた現実と直面すると
言葉を失うというが、
私は、まさしく言葉を失った。
耳はほとんど聞こえず
右半身は麻痺し、喉には人工声帯、
心臓にはペースメーカー、
会話は筆談、という斉藤さんにお会いした。
通常人なら病床にあるであろう身体で
斉藤さんはヨットを始めた。
もやい一つを取るのに
何度も何度も失敗しながらも
無心にもやいに向かうその姿に私は涙した。
手の届く、目の前にある大きな“苦”に対して
何もできない、してはいけない苛立ちに
私の胸の奥の、黒いかたまりが溶けた。
本当に海に向かうということは、
生きる、ということは、
こういうことをいうのだろう、と。

(本誌編集チーフ・田久保雅己)

写真/山崎武敏

ある老人の船出。



バウのもやいを取る斉藤さん。ポートフックを左手で操る。右半身は麻痺しているが、添える程度には右手も使える。着岸と同時に風上側のもやいを取る。あとの3点は何時間かかってもいい。「速く」という言葉は斉藤さんの辞書にはない

出航



取材した日は3回目（1回3日間）の出入港の練習日だった。同志社大学時代はヨット部に所属し、琵琶湖をセーリングしていたという。また社会人になってからは射撃を趣味とし、29歳の時には国体にも出場したという。発病する前までは、15年間銀行員として活躍した。ヨットについては、プランクが長く身体的条件も違うため、基本から操船を学びはじめた



艇名は「エトピリカI」、水鳥の一種だそうだ。艇種はブルーウォーター21、中古で購入。斉藤さんに合わせた改良が施されている

ある船出

文/田中章慈

**最初の発病は16年前。
斉藤さんが47歳のときだった。**

「30年まちました」

平成7年1月20日、和歌山のホテル・サンピアにて、〈エトピリカI〉（ブルーウォーター-21）の進水を祝う小さな宴での、オーナー斉藤さんの第一声、詳しく言えば左手でのたどたどしい一筆である。



首の部分に人工声帯がのぞいている。多くをしゃべることはできないが、コミュニケーションははかれる。耳はほとんど聞こえないが、補聴器をつけているため、かなり大きな声なら聞こえるようだ

斉藤寿（ひさし）さんは、名古屋市在住、昭和6年生まれ、63歳。病気療養中心の毎日である。斉藤さんの病気との闘いは1979年から始まる。最初の病状は左耳下部のしこり。愛知県ガンセンターで喉頭ガンと診断され手術。術後、声は奪われたものの比較的順調な経過をたどってはいた。ところが8年後の1987年、今度は心臓の心拍を調整する刺激伝導系に異常が出現、ペースメーカー装着を余儀なくされる。ペースメーカーとは、動きが悪くなった心臓に電気刺激をあたえて鼓動を促す器械で、装着者は身体障害者に準ずる病態と認定されるほどのものである。

1988年、頸部に多数のしこりがあることに気づき、愛知県ガンセンターへ再入院。精査の結果ガン再発とされた。9年後の再発である。

1991年6月、ガンの一部が頸動脈に浸潤し頸動脈出血を繰り返すようになった。出血死の危険が切迫し、救命手段としては頸動脈塞栓術を受ける以外にない。しかし、頸動脈を詰めてしまえば脳の左半分の血流が遮断される。人工的な脳血栓を惹起することになり、この手段そのものが危険な賭けである。

「どんな身体になってもいい。とにかく命を」

家族の意見がまとまり手術を受けることになった。

術後の状態は低空飛行そのもので、幾度も危機を迎え、昏睡状態は実に3週間に及んだという。幸い命は助かったものの、言語や運動機能など高次な精神・神経機能が麻痺し、まさに植物状態に近い斉藤さんになってしまっていた。

海への想い 執念のリハビリ

家族にガン患者が出るとそれだけでも大変である。頸部への再発が認められた時点で、

医師から根治術のすべなく余命いくばくもないと告知された斉藤家に、さらに意識障害をもった重度の片麻痺という大きな障害がのしかかってきた。常にガンによる生命への脅威にさらされながら、意識はあるが理解力も判断力もどの程度のものか検討もつかない。言葉は不明瞭で、手足の動きもかなわぬ病人を暖かく見守っていくことは並大抵のことではなかったと思われる。

術後しばらくの間、食事は流動物としてチューブで胃へ直接送り込まねばならなかった。意識が出てきたといっても、本人がどこまでわかっているやら介護する側にはわからない。コミュニケーションをとるため、透明板に字を書いて、斉藤さんの顔の前に置き、眼球の動きで言葉を探ることから始めた。麻痺した筋肉を放置しておけば悪くなる一方なので丹念にマッサージを施し、繰り返し繰り返しリハビリを開始した。

なかなか思いどおりにならない。簡単にできたことが全くできない。いらだちと、絶望と苦痛と、そして少しの喜び。三歩進んで二歩下がれば良い方。そのときの精神状態によりできるはずのこともできなくなる。

身体が病めば心も病む。

かたくなな病人の心に入り込めるのは家族の愛しかない。学生時代ヨット部員であった斉藤さんの心の中に、ヨットへの思いを見出し、船や海への思いを育ててきたのが奥さんの和子さんである。リハビリに励む斉藤さんの唯一の楽しみは“KAZI”を見ることで、発売日をきっちり覚えており、買いに行けとうるさくくらいに和子さんにせがんだという。もともと海洋関係の本を多数お持ちであるが、心のリハビリは“KAZI”が基本となってすすめられてきたとも言える。

自分で歩く、 ヨットへ向けて歩く。

不思議なことに、リハビリが進むにつれガンのほうはおとなしくなってきたようで、頸部にしこりはあるものの、進展の気配はなくなってきた。外出も許可され、遠出ができるようになって第一に希望したのは東京晴海でのボートショー見学であったという。

出入港の練習のため、ポンツーンの船の周囲には大きなブイが数珠つなぎで設置されている



アンカーはチェーンが不要で、重量が通常の半分で効力は約倍というバルカン・アンカーを採用。スターンに常設でアンカーローラーがついている。バルビットにコイルしてあるラインは現在は使っていないが、デッキ上を自由に動けるためのハーネスフック用のライン



ティラーは通常より約1.5倍の長さには伸ばしてあり、シングルハンド用にとの角度でもティラーを固定できるようになっている



トイレは電動式で出入口下のステップの所に設置されている。もちろんステップは跳ね上げ式



1994年9月、

「大阪へ行ってくる」

突然斉藤さんが言い出したとき、和子さんは、あるいはと感じたという。念のため斉藤さんが家から出かける直前に、

「ヨットを買ってはダメですよ」

と、きつく申し渡したそうである。

「買わなかったね」

「買わなかったが、予約してきた」

無事の帰宅を喜びつつ尋ねた返事がこうであった。

どうやら斉藤さんの大阪行きは、密かなる決意がひそめられていたらしい。

「ヨットで日本を一周したい」

それは夢の具体化への第一歩であった。

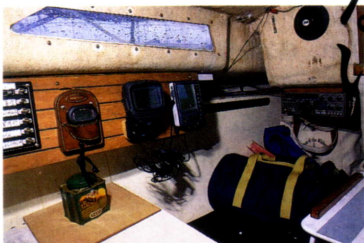
斉藤さんは、自分の夢の具現者として青木洋さんを選び出していた。青木さんは若い頃、〈アホウドリ〉と名づけたヨットで世界一周を達成された方で、彼の最小ヨットでの世界一周記録はいまだにギネスブックに記載されている。

大阪府泉佐野でヨットの販売やメンテナンスをする青木ヨットに、斉藤さんが突然現れた。二人に面識は全くなかったが、斉藤さんは青木さんの著作を幾つか読んで何か感じるところがあったと思われる。

闘病生活の支えにしていたのが、ヨットで日本中を巡りたいという夢であったこと、自分は身体が不自由なので自分に合わせた船を造ってもらいたいと、筆談も交えて斉藤さんは一生懸命訴えた。一見して右手が麻痺しており、足取りもおぼつかない顔のゆがんだおっさんの話に青木さんは本当にびっくりした。しかし学生時代はヨット部員で、琵琶湖でセーリングを楽しんだこともあるという斉藤さんの話を一応は聞いて

神を信じていても、海が怖いことには変わりはない。

航海計器や関連用品は艇を購入する前から入手していた。自宅で関連用品を眺めながら海洋へ夢を馳せていた斉藤さんの意気込みがうかがえる



みることにした。これを契機に数回の電話や手紙でのやりとりの後、青木さんは名古屋まで出向き、斉藤さんの御家族とも話し合う機会をもった。

実際に斉藤さん宅に現れた青木さんに、今度は和子さんが驚いた。船を持って日本を巡りたいという斉藤さんの夢があることは十分にご承知の和子さんである。しかし本気になって斉藤さんの夢に取り合ってくれる方が出たこととは。こんなハンディキャップだらけの人の言うことを真摯に受け止め、大阪から名古屋へわざわざ来てくれようとは考えもつかなかったらしい。

斉藤さんの自室は倉庫さながらの観を呈し、海洋関係の本は言うに及ばず、船の備品や、ちょっとした機器が所狭しと並べられていた。本を捲り、カタログを集め、来るべく船出に着々と備えておられる斉藤さんの姿は鬼気迫るものがあり、圧倒された青木さんは名古屋でようやくこの話を具体化していくことを決心したのである。

ヨットの改造に取り組む

元来ヨットは、健常者のためのものである。船を操るには判断力と体力を要し、特に出航や着艇、方向転換などでは機敏な動きが要求される。さらにヨットでは風と波に刻々と反応しなければならない。天候が荒れ模様にならねば屈強なセーラーでもパニックを引き起こすこともあり、人はただ自然の脅威におびえ、キャビンの中で自分の身体をどうにか固定し、ひたすら神に祈るしかない。

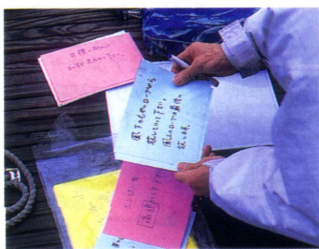
陸からは優雅に映るヨットに、単なるゲストとして斉藤さんを乗せるのではない。斉藤さん御自身の手で何もかもしてもらわねばならないのである。命をかけて大自然と対決され、船の装備のエキスパートである青木さんも、斉藤さんの身体の状態と船をどのように合わせれば良いか考えあぐねる日が続いていた。

ヨット関係のパーティーの帰路、南海電車の中で、青木さんは和歌山市内で開業している内科医の、私、田中章慈と一緒にあった。私と青木さんは以前からヨットを通じた知り合いだった。この時、実はこのような話があったってヨットの改造に取り組みたいのだけれども、身体のことが分からずどうしたものか悩んでいると打ち明けられた。

いきさつを聞かせていただいた私の心は震え、たとえ日本一周はかなわなくとも、なんとしても斉藤さんに船出してもらいたい。そしてこのような方がおられることを、同じ病気で悩む多くの方々に知ってもらいたい、むしろ知らせるべきであろうと考えた。

まずガンに対して考えた。すでに斉藤さん

→進水を祝う小宴で、田中医師がお祝いの言葉を書いたのに答えた斉藤さんの第一声(第一筆)。周囲にいた人たちは、左手でなぞるように書いたこの言葉に胸が熱くなったという



指導のため、操船にかかわる基本的な言葉は予め紙に書いてある

操船の指導をするのは青木洋さん。とにかく何も手伝わない。手伝ってしまえば、いつまでたっても一人で海に出ることはできないからだ。ハリヤード類はすべてコクピットヘリッドされ、座ったままシートを扱えるように調整中。ホルドのいい移動式の椅子の設置も研究中だ



は、日本でも有数の施設で治療しておられ、我々が関与できることは何もない。ただしガンが今後どのような影響を及ぼしてくるかとなると、それははっきりしている。今は落ち着いてはいるが、着実に身体を蝕んでくるだろう。体力、気力、根気が失われないうちに事を運ばねばならないのである。

心臓に入っているペースメーカーについても同様で、私たちの考慮の対象外とした。

私たちは片麻痺という病的状態が許容できる船造りを心掛ければよいのである。神経学的に見れば斉藤さんは右片麻痺を呈しているが、しっかりと起立できる。多少尖足歩行だが陸上ではどこへでも行ける。しかし不安定な船上では、身体を固定して、できるだけ動かなくてもよいような算段をしなければならぬ。

デッキに突き出している通常の装備やわずかな段差が大敵で、右足を引っ掛けてしまう。揺れ動くコクピットで操船するためには、足だけでなく動きの悪い右肩部分を使って身体の安定化を図る必要があり、例えばリュックを背負うような固定装置を付けなければならないかもしれない。大部分、左のみの片手操作となり、できるだけ手元にシート類を集中させ、ロックも容易に掛け外しできなくてはならない。メインセールのみならずジブセールもファーラーシステムが望ましく、セールの横方向への展開やタッキングでは電動ウインチが不可欠であろう。オートパイロットシステムは必須であろう。

出入港、特に着艇が大問題だ。フェンダーを取りつけに行くことが危険で、できれば手

進におめでとう
ござります。
30年まじました。



医学的見地からさまざまなアドバイスをする田中医師は、和歌山オーシャンヨットクラブのメンバーで、淡輪にデュフォーの41フィート艇を所有しているヨットマンでもある。「普通は病気に負けてしまい、次の意欲を失うのですが、斉藤さんは違います。明確な目標をもち、プラス思考で、病気と一緒に生きている。医学的な根拠はないのですが、病は気からといいますが、まさに斉藤さんの場合はヨットに乗ることによって、病状に好影響を与えていると思われる。また、リハビリにヨットを利用したケースのプログラムも、今後の貴重な資料になるでしょう」

グを楽しみ、ハンディキャップをもっている方々のトレーニングプログラムも確立されていると聞く。我々にはそのようなものはなく暗中模索の試みとなろうが、やはり勇気づけられるものである。

トレーニングと同時に、支援のネットワーク作りを始めた私たちであるが、あくまでも斉藤さん御自身の手で船出し、海路を開いて航海していただくことを目的としたい。斉藤さんをお客のように導いて日本一周を安易に達成させてあげるつもりなどないし、斉藤さんもそのようなことはお望みではないと思う。

しかし斉藤さんにとって、現実厳しく、望まれるならばクルーとして乗り込んだり、あるいは寄港先での機材取りなどのできるかぎりの助力を尽くしたいと思う。

「仮に航海途中のトラブルで命を落とすことがあっても、それはこの人の寿命だと受け止めます。ここまで来られたのですからそれはこの人の喜びでしょうね」

斉藤さんの奥さんや和子さんの言葉である。

医師の眼から見れば、斉藤さんのケースは極めて特異で、詳しいガン組織の所見を知り得ずいい加減な言い方であるが、ガンの進行がゆっくりしたものであったことが幸いしているように思われる。インフォームドコンセント(病状を偽りなく告知し、患者の理解と合意を得て病気に取り組む姿勢)がこれほどきっちりと図られ、病気を克服したとは言えぬまでも、病気とともに懸命に生きる姿に深い感銘を覚える次第である。

「ボン・ボヤージュ」と大声で送り出す日が待ち遠しく思われる。

進水おめでとうございます。

夢ではない。 本当に夢は進水した。

平成7年2月17日、青木さんがトレーナーとなって、いよいよトレーニングを開始した。前日から船に泊まり込んではりきっている斉藤さんではあるが、やはり時間がかかりそうである。折りしもオーストラリアやニュージーランドでは、眼の不自由な方々もセーリン

ヨットは自分だけの 世界が作れる。 そして、いい仲間が分かる。



黙々と、音のない世界で、風に流されては落ちるもやいに向かう斉藤さん。この5月には日本一周に向けて船出したいというが、その道は険しく、遠い。健康者が海で感じる風や波は、斉藤さんと「エトピリカ」にとってはその数倍の脅威に映るに違いないのだ。

ボランティア募集

勇気ある斉藤さんの日本一周を応援するボランティアを募集しています。艇の改造、航海補助、泊地案内、食糧買出し、燃料供給、サポートボート提供、何でもけっこう。斉藤さんのためにお手伝いできる内容、お名前、連絡先を明記の上、郵送またはFAXで舵社編集部（〒105東京都港区浜松町 1-2-17 ストックベル浜松町 株式会社 舵社 編集部S 係 FAX 03-3434-5184）までお送りください。



病に冒されて
人生を始めた
ある老人の船出。